

不良少女

鞠猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サイトで連載していたもの多少変更しながら移動中

本編

9	8	7	6	5	4	3	2	1
53	48	41	38	30	23	14	6	1

目次

本編

1

宮地 side

昼休み

俺の前に座る未来の弁当から玉子焼きをパツと取り口に放ると眉間に皺を寄せ睨みつけてくる

「宮地っ返せ！」

「はっ！残念だったな！もうねえよ！」

「ならそれ寄越せ！」

「取れるもんなら取ってみろ！」

俺の弁当に伸びる箸をヒョイと避け立ち上がるとそれを追い弁当を置き未来も立ち上がるが持ち上げてしまえば身長差で届かない

すると更に俺を睨みつけた

「この女顔」

「!!、テメツ轢くぞ！男女！」

「!!、上等だ轢き返す」

「木村！軽トラ!!…真似すんな！」

「……」

屋上で繰り広げられる罵声に大坪と木村は傍観を決め込み弁当を食べ続ける

しばらく続いたそれは大坪の一言で簡単に幕を引いた

「昼休み終わるぞ」

「!!」

俺は急いで弁当をかき込み終わると同時に予鈴が鳴った
未来を振り返るとマイペースに弁当を食べていた

「授業始まんぞ」

「いやサボる。古典はめんどい」

「…そーかよ」

「ん」

投げて寄越された飴をキャッチし、軽く礼を言って大坪達を追って屋上を後にする

2人に追いつくと大坪がため息をついた

「お前らすぐ喧嘩するのどうにかならないのか？」

「初めて話した時から喧嘩腰だったからな…今更って感じだな」

「そーいやお前等の会ったときの話は聞いたこと無いな」

「そーだっけ？」

「宮地がいきなり連れてきたんだろ。しかも無理矢理…」

「覚えてねえ」

「1年の時だからな…色々衝撃だった」

教室につきそれぞれの席につく

授業が始まり、俺は未来との出会いを思い返していた

あの日、俺は部活を終え一度家に帰ってからストバスで1人練習をした

ある程度時間が過ぎ、休憩をしていると脇道から数人ボロボロになった男が走り去って行く

その後秀徳の制服を着た女子が出てきた

よく見ると至る所に傷を作っている

「おいー！」

「…」

「おい！止まれって！」

無理矢理腕を掴み歩みを止めると痛かったのか顔をゆがめ腕を振り払った

「悪い、つかその怪我どうしたんだよ」

「他人のアンタには関係ない」

「さつき走ってった男達か…来い」

「だから関係ねえつつってんだろ！」

「いいから来い!!轢くぞ！」

「は？あんた免許って離せ！」

無理矢理腕を引き鞆を置いてあるベンチに座らせる
鞆から一応持つてきていた救急セットを取り出し脚、腕の傷を消毒
し始める

「構うなって！蹴るぞ！」

「うるせえ！轢くぞ！」

「だからテメエ免許、いっく！！」

「ザマア…つか女が顔に傷つくんなよ」

染みたのか一気に大人しくなったので消毒を続け、最後の頬に絆創
膏を貼り道具を片付ける

その時ふと思いついたことを口にする

「アンタ月島未来だろ。周りは敵だらけ、誰も寄せ付けない一匹狼」

「…知ってるなら話が早い。今日の話は礼を言うけどもう構うな」

立ち去ろうとするその隣に並び一緒に歩くとギツと睨みつけられ
た

「何」

「宮地清志」

「は？」

「俺の名前。これで他人じゃないだろ」

「…うっぎ」

「なんとでも」

「…女顔」

「テメ!!気にしてんだよ!!」

「はっいいい気味だ」

そしてその次の日

昼休みに月島を捕まえ大坪達のもとへ向かっていた

周りの目が驚きに満ちていたのは滑稽だった

「離せよ、つか弁当返せ」

「一緒に昼食うぞ」

「は？ふざげんな。んでお前なんかと」

「俺だけじゃないけどな」

「は!?!」

空き教室

俺達は何時もそこで3人で昼を食ってる

扉を勢いよく開け中へ入ると2人は目を見開いて固まった

「今日からコイツも一緒だから」

「ふざけんな。了承した覚えはない!」

「1人より良いだろ。つかいい加減諦めろよ焼くぞ!」

「慣れてるから良いんだよ、焼いてみる女顔」

「テツメエ…この男女が!木村!軽トラ貸せ!」

「だから無免だろお前は!」

ギャーギャー騒ぐ俺達に啞然としていた2人は俺達を止めにかかった

「とりあえず落ち着け2人とも!」

「そーだ落ち着け!」

俺は大坪、月島は木村におさえられ、2人はどーどーと落ち着かせようとする…馬か!!

月島はふーと猫のように威嚇して睨みつけてくるが、息を一つ吐くと力を抜いた

「離せ」

一言、はつきりそう言うとき木村はパツと手を離れた

そして月島は俺の前に立った

「昨日も今日も何故関わろうとする。噂知ってるんだろ。見ただろここまで来る間見てる奴らの顔」

弁当をひつつかみ去ろうとするその背に声をかける

「寂しくないわけ?」

「慣れてるっつたら」

足を止め振り返らずそう言うとき大坪が口を開いた

「飯食うときくらい1人であるより良いと思うぞ」

「そうそう、人と食べた方が美味いぜ」

「大坪、木村…」

「…なんで」

振り返った月島は迷子の子供が見つけてもらったみたいな顔を
して戸惑った

「なんでそんなに構うのさ、お前等も知ってるだろ。私は…」

「喧嘩が絶えず、目があったら即喧嘩、最近じゃ薬や援交してるなんて
言われてる、誰も寄せ付けようとしな一匹狼…だろ」

「っそうだよ。良いことなんてない」

「でもそれは噂だろう?」

「え…」

大坪は月島に近寄り頭を撫で、こっちに向かつて背を押した

「それは本当の事なのかどうかは置いといて、俺たちがこれから月島
を知っていけばいい」

「っなにそれ…」

大坪の言葉に瞳が揺れ、俯き震えた声でそう言う

俺は口が弧を描くのを感しながら月島の前に立ちポンポンと頭を
撫でてやる

「そうそう。所詮それは噂で本当は優しくされたら泣いちやう強がり
な可愛い可愛い未来ちゃん?」

「っうる、さい女顔」

俺の肩に頭をコツンと預け声を漏らさないように泣く月島を抱き
しめ背を撫でる

「はいはい、次それ言ったらパイナップル投げんからな」

「パイナップルって…あはっなにそれ」

そう言つて肩を揺らす月島の顔を覗き込むと笑っていた

「笑えるじゃん…あ、俺は木村信介」

「俺は大坪泰介だよろしくな」

「…ん」

よろしくと言つて笑つた月島はとても綺麗な笑顔だった

あれから月島は俺達と行動することが多くなった

それは今でも続いている

未来 side

宮地達バスケ部は誠凜とかいう新設校に負けた

次の日必ずリベンジすると言って体育館に向かう彼らの背を見送ってあの空き教室に来た

外で部活する声が小さく聞こえ、それをBGMに机に伏せた

しばらくすると何か怒鳴り声が聞こえ伏せていた顔を上げ耳を澄ませた

「緑間はキセキの世代だからしょうがないけどさく別に前は違うだろ」

「そつすよ。ただのバスケ好きの青年つすよ」

「なのになんでレギュラーになっているんだよ!」

「実力じゃないっすか?」

「つどうせ緑間や主将達に媚売ってるんだろ」

窓からちらりと下を見る

ちなみにここは2階

そこには5人の…あれは、2年に囲まれた…1年

「なんだっけ…緑間は…190越えだから高尾か?」

今年は1年が2人レギュラー入りしたと苛立ちながらどこか嬉しそうに宮地が言っていたのを思い出し名前をひねり出すと鈍い音がして再び視線を戻した

そこには尻餅をつく高尾の姿

「ゲホッ」

「ただ鷹の眼とか目が良いだけで他は何も無いじゃん」

「誠凜にも負けたしな」

「マジム力つくんだよお前!ヘラヘラしやがって」

笑って受け流そうとしているのだろうが、ああいう輩にはそれは逆効果だろう

「ああそうだ、バスケ、出来ない身体にしちやえばよくね」

1人が言った瞬間、高尾の表情が凍りついた
ヘラヘラしていた顔は引きつり眼には恐怖が浮かんでいる
後ろで携帯を取り出した奴が一枚写真を撮った

「俺らも問題起こすのは避けたいわけで、まあ弱み握っとくか」

「なあ、こいつ顔良いし肌白いじゃん…やつちやう？」

「お、いいんじゃないね」

「な!?!やめっ!」

暴れ出す高尾の両腕を2人で押さえると蹴りを入れ大人しくさせ
制服を引き裂いた

「ゲスどもめ」

私は携帯を取り出し窓枠に足をかけた

高尾 side

ヤバイヤバイ

バスケ部の2年生に呼び出され校舎脇に来たまでは良い

いつもなら罵声を浴びせられちよつとした暴力だけだけど今回は

ヤバイ

両腕を俺よりもがたいの良い先輩2人とられ動きが取れない

先輩達は笑いながら近づいてくる

顔や髪を触ったり俺のビクつく反応を見て楽しんでんだろ…本当

性格悪

携帯でそんな俺の様子を写しているのもいて…本格的にヤバイ

犯された挙げ句に弱みまで握られんの？

バスケやめさせられるとか？

嫌だ…そんなの、やだ

誠凛に、黒子にリベンジしたいし、先輩や緑間とバスケしたい!

必死で抵抗して、叫ぼうとするも腹を蹴られて失敗に終わる

いつの間にかシャツは引き裂かれて肩から落ち、頭に先輩の笑い声
が響いて、もう頭の中が恐怖で真っ白になって何も考えられなかつ
た

喉からはヒューヒューと息しか出なくて首をイヤイヤと横に振るも先輩の手が肌に触れ、舐められ、弄られ、気持ち悪くてギョツと目をつぶると

ピロリッン

という音がし、ハッと目を開けると目の前にいた先輩は横つ面を蹴り飛ばされ地面に転がり、両脇にいた先輩達も吹っ飛ばされた

携帯を開いていた2人も地面に転がっている

支えを失った俺はペタリと地面に座り、滲む視界でふわりと靡く金髪に目を奪われていた

「後輩を無理矢理襲う先輩ね…学校に提出してみつか、面白そうだ」

「お、まえはー!」

「あゝあゝ?」

地面に転がる携帯、先輩達の携帯を全部チェックし躊躇なく簡単に逆パカし地面に落とした

「失せろ。つか先輩にお前って捻り潰すぞテメエ等」

後ろ姿だから表情は分からないが逃げていった先輩等の様子からすげー怖かったんだろぅなとぼんやりと考えた

振り返った先輩は…メイクバツチリ不良みただけけど綺麗

「大丈夫か」

「え…あー平気つすよ」

「…立てるか?」

試しに立とうとするも力が入らず笑いながら先輩を見上げる

「殴られたりしたところが痛いんで、しばらく休んだら大丈夫つす、ありがとうございます」

「…:…はあ」

ため息を吐き、膝をつくときシャツを肩にかけてくれて更に着ていたブカブカのカーディガンもかけて前を閉めてくれた

再びお礼を言おうと口を開く前に俺の頬に手を添え、親指で目の下をなぞると肩を掴み勢いよく引き寄せられた

ペタンと地面に座り込んで俺は先輩の柔らかい胸にダイブした
ラッキーと思いつつも戸惑う俺は顔を上げる

「えつと…先輩？」

「アイツらから聞いてたが本当に不器用だな…昔の私みたいだ」

「アイツら？てか俺器用つすよ？」

「いや、笑えてねーし、声震えてんぞお前。怖かったんだろ」

「んなっ！別に俺は！」

「はいはい別に強がらなくてもいいっつーの。あんま強がってつと無理矢理泣かすぞ」

「うわこっわー、うぶっ」

再び頭を胸に押し付けられポンポンと撫でられ、優しく背中を上下する手が優しすぎて、硬直し冷えた体が中から暖かくなって、さっきの恐怖が嘘みたくに安心して

「はーい、いい子いい子」

「棒、読みじゃないっすかっ…」

見知らぬ先輩に泣きついてしまった

宮地 side

「緑間!!高尾はどうした!」

「ようがある就先に行くよう言われたので」

「サボりかあ?…緑間loni付き合え!」

「俺はシュート練がしたいのだよ」

「テメエ…木村軽トラ!!」

「そこ五月蠅いぞ外周行つてこい!!」

部活が始まってもなかなか姿が現れない高尾に苛立ちながら緑間にあたり、大坪に怒られた

くそ…何で俺まで

休憩時間に部室までタオルを取りに行くとき携帯が光っていた汗を拭きながら開くとメールが一件

FM：月島未来

件：無題

高尾寝たからメール見たら校舎裏に迎えに来い

「は？」

思わず汗を拭く手が止まった

何、高尾？つかあいつ何してんの

…30分前か

返信することなく携帯をしまい部室を飛び出ると木村とすれ違っ
た

「おい！宮地!？」

「木村：ちよつと用が出来た。大坪に言っとけ」

「は？あ、おい！宮地！」

木村の止める声を背に受けながら校舎裏へ向かう

校舎裏につくとそこには

「何この状況」

脚を伸ばし木に寄りかかって眠る未来の上に横向きで座り、未来に
寄りかかって眠る高尾の姿

周りには使い物にならなくなっている携帯であったであろうもの
が5つ

近寄って見ると高尾には泣いたようなあとがある

そして高尾が着ているのは未来のカーディガン、その中のシャツは
ボタンがすべてなくなり地面に転がっていた

以上の事から辿り着いた事に頭を乱暴にかいて深く息を吐いた

すると未来の目が俺を捉え眉間にしわが寄った

「遅え」

「うるせえ、部活やってんだから仕方ねえだろ」

そう言いながら未来の隣、高尾の足が伸びてない方へ座る

片膝を立ててそこへ肘を置き高尾の背もたれを作り空を見上げる

ちらちらと葉の間から太陽の光が射し目を細めると、額に手を置い
た

「全然気づかなかった」

「ひた隠ししてたみたいだからな」

「チツ生意気、後で轢く…で？」

「だから無免だろ。んーと確か2年…コイツ等」

ポチポチと携帯をいじり見せてきたのはなんともまあ腹の立つ写真
真

「あーコイツ等ね…監督に言つとく。つか2階から飛び降りたら、死ぬ気か」

「そーしろ。2階から落ちたくらいじゃ死なねーって」

すると未来は大きな欠伸をした

その目はトロンとしていていつもの鋭さはなかった

「ねみい…肩貸せ」

「は？おい！」

「うるせえ、寝かせろ」

数秒で眠りに落ちた未来

キラキラと太陽の光が当たり風に靡く金髪が光る

顔にかかった髪をのけてやりスヤスヤ眠る2人を見ていると眠気が襲ってきた

「ふあ…」

未来の頭を枕にし目を瞑ればすぐに意識は飛んだ

部活が終わり俺らを探しに来た大坪と木村に写真を撮られた挙句練習を増やさされたの言うまでもない

高尾 side

大坪さんの大声で目を覚ました俺はその状況に狼狽えた

「うるせえ大坪」

「大坪さ、え、先輩…えと、え？」

俺は助けてくれた先輩の脚の上に座り眠っていたらしい
それよりも驚いたのは俺の後ろにいた

「やべ…がつつり寝てた」

宮地さんだ

「まったく、探しに来てみればこれか」

「珍しいな宮地。そんなに寝心地良かったのか？」

「っ木村ああ!!」

ニヤニヤと宮地さんにちよつかいを出す木村さん

宮地さんは木村さんにかかって行こうと立ち上がると俺は後ろに倒れかかる

「うおっ！」

「やべっ」

寝起きで全く体の反応しなかったので咄嗟に目をつぶった俺の背には2本の手

そつと目を開くと俺の視界は金色に輝いていた

「大丈夫か？」

「…う、あ、はい」

金色に輝いてたのは太陽の光を反射する2人の髪

俺が返事をする、のぞき込んだ2人の目が優しく細まった

「よかった」

「だな…というより高尾、いつまでそこにいる気だ？ん？」

宮地さんの言葉に俺は自分の大勢を見直し慌てて立ち上がる

「うわ、先輩すいません！重かったっすよね…」

立ちくらみでふらふらしながらも謝ると先輩も立ち上がり俺の頭を撫でた

「いいさ、高尾も元気になったようだな」

「ちよっ先輩！それは！」

「あー大坪、監督と話がある」

「高尾の今の状態の関係だな」

宮地さんが頷くと大坪さんは俺を見て眉をひそめ、そう言うと木村さんも同じ様な表情をした

俺の今の状態って、あ…

「高尾」

「はい…」

俯いた俺の視界に大坪さんの足が写ると頭に温もり

「少しは相談しろ」

「つすんません」

「高尾」

先輩の声に後ろを振り返ると優しく微笑まれた

「カーデイガン、今度でいいから返してね」

「あ、はい!!えつと…」

「月島未来、好きに呼びな。じゃな宮地、大坪、木村」

「おお今日はありがとな」

「また明日な」

「帰りに喧嘩すんなよ男女!」

ちよ!宮地さんそれは酷いと言う前に未来先輩は宮地さんにドロップキックをかます

「黙れ!この女顔!」

「いてえなチビ!轢くぞ!」

「こちとら平均以上だよ!テメエがでえんだバアカ!轢き返すぞ!」

「はん!出来るもんならやってみろ!」

「よし、今度バイクで轢く。つかお前2年で伸びすぎだろ!」

「成長期だ!!」

「うぜえ!!」

さつきの優しい表情とは一転、綺麗な顔を歪ませ宮地さんに掴みかかる未来先輩

宮地さんも顔を笑っているものの青筋がたっている

さつきとのギャップが強すぎてついていけねえ

「あの、木村さん…」

「アイツ等はあるがコミュニケーションみたいなものだ」

「内容は1年の時から成長しないな」

「なんか似たもの同士って感じじゃないっすか?」

「だろ?」

「似てねえ!!…真似すんな!!」

同意した大坪さんと木村さんに同時に振り返りハモると威嚇しあう宮地さんと未来先輩に思わず吹き出した

未来 side

「未来せんぱーい!!」

朝の登校、ヘッドホンをしてるにも関わらず聞こえた声にヘッドホンを外し、後ろを振り返り…再び歩き出し校門を通る

「ちよちよちよ!!無視しないで下さいよー」

隣に並んだチャリに乗る高尾

そこまではいい

「(何でリアカーを引いてんの)」

取りあえず後ろは無視しヘッドホンを首にかける

「はよ」

「おはよーございませす!後ろ乗ります?」

「のらねーよ」

「ですよねー。あ!ちよつと待って下さい!」

昨日の事が嘘のように明るい高尾に内心安心した

駐輪場にあれを置き、後ろに乗っていた緑間?と一緒に戻ってきた

「未来先輩!はい!カーデイガンありがとうございます!」

「あ?早かったな…で、お前が」

「…緑間真太郎です」

「緑間ね、月島未来。よろしく」

「はい、よろしくお願いします」

なんだこいつ、話続かねえ。つかデケエよ、バスケ部みんなデケエ、首いてえ…というか

「なにそれ」

私の視線の先は緑間の手に持つもの

「何って、今日のおは朝のラッキーアイテム、サボテンなのだよ」

はい?ラッキーアイテム?サボテン?いやそれよりも

「な、なのだよって…」

「真ちゃんの口癖なのだよ」

「真似をするな高尾!」

宮地達から聞いてはいたが実際に会ってみると思っていたよりもいい奴かもしれないと思いい口が弧を描いた

「ふっ、じゃあな高尾、緑間」

「あ、はいー！また!!」

「ふん」

ずれてもない眼鏡を直した緑間

いい奴だと思うが…なんだか付き合いづらそうだ

昼休み

屋上で弁当を食おうとすると座る前に皆が手を合わせ頭を下げた

「頼む!!」

「なにが」

いきなりのことになんかイライラし始め眉間にしわが寄るのが自分でも分かった

「あー、その…夏!」

「が?」

「合宿あんだけど」

「で?」

「手伝ってくんね?」

「はあ?」

詳しく聞けば、今まで2年間はマネージャーいたらしいが、今は卒業して自分達でマネージャーもやっているそう

そら大変だな

うむ、めんどくさそうだ、断ろう

フェンスに寄りかかり、そう思うと同時に屋上の扉が開き緑間をつれた高尾が現れた

「あーいた! 未来先輩!」

「高尾、って! あぶねえ!」

緑間の手を離し勢い良く走り込んできた高尾はそのまま抱きついてきた

すぐさま引き離すと両手を掴まれた

「未来先輩！夏！合宿来てくれるって本当っすか!？」

おい誰だ勝手に決めた奴

高尾の後ろを睨みつけるように見ると視線を逸らす大坪

「テメエが大坪お!!」

「悪い…」

「謝ってすむならサツはいらねえんだよ、この隠れ乙女」

「おと!？」

「編み物が得意とか女子か!!その図体で！」

シユンとなる大坪、もつと言つてやろうと思つたが袖をツンと引つ張られることで中断

後ろを振り返るとまっすぐ目を見る高尾

「来て、くれないんすか」

「…」

「俺、未来先輩来るって聞いて超嬉しかったんすけど…無理ならしよ
うがないですよね」

シユンとなる高尾、大坪と違いなんかすげー可愛い

思わずその頭を撫でた私は悪くない

「いや、無理じゃねーけど、やったことねーし」

「マネ業はいいよ、自炊だから料理頼みてえの」

宮地にも言われ、助けを求めるため緑間を見ると視線を反らされた

木村とはそうそう視線が合わない

「……はあ、分かったよ」

「マジっすか!!やりい！」

「流石高尾。いい演技だ」

高尾とハイタッチをする宮地

宮地と視線が合うと鼻で笑われた

「宮地テメエ、はめやがったな!!」

「あははー見事にはまったな未来!!」

「ぶっ殺す」

喧嘩をする体制に入ると後ろで高尾が爆笑し始める

「夫婦漫才は後にして下さい。昼休み終わりますよ」

「誰が夫婦だ！緑間！轢くぞ!!」

後ろで高尾が笑い死んでるのを感じ、こんな日常も悪くないかなって思うなんて、私も随分変わったな

その後、宮地におかずを取られ言い争いが始まった

高尾 side

「高尾、お前は月島先輩の事が好きなのか？」

「へ？」

昼休みが終わり、教室に戻る途中唐突にそう言われ思わず静止した
「えっと…月島先輩って未来先輩、だよな？」

「他に誰がいる」

緑間の言葉にうーんと唸りながら考える

未来先輩は前に助けてくれた先輩で俺の恩人

初めて見たときはすげー綺麗ですげー優しくてすげー怖くて

だからといって緑間の言うような恋愛感情という物はない

強いていうなら……

「姉さん…とか？」

「は？」

真ちゃんの間抜けな顔に思わず吹き出すと殴られ、理由を催促された

「いやね？俺、別に未来先輩好きだけど恋愛感情と違って別にありたいこーなりたいたいかねーし？ただ構ってもらいたいーっていうかなんつーか」

「それで姉か」

「そう！なんかこう…オーラとか雰囲気つーの？それがそんな感じ？言動は怖いけどな」

「俺にはそう感じないのだよ」

「俺にはそう感じるのだよ」

真似をするなど怒る緑間を笑いながら足を動かす

うん、なんかスツキリ

今までそんなこと考えたこと無かったし、改めて考えると…うん、

やっぱりそんな感じ

「それよか宮地さんだろ！」

「？」

「絶対未来先輩に好意持つてるぜ！」

「何故そう思う」

「だってさー！俺が未来先輩と話してたりー、特にじやれてたりする
とき殺気立った視線が突き刺さるんだもん！」

周りには聞こえない程度の声量で緑間に言うて目を見開いて驚い
ていた

あれは多分木村さんや鈍い大坪さんでも気づいてる、3年も一緒に
いるしな

「今度見とけてっ！つかいつか俺轢かれそう！」

ゲラゲラと笑っていると午後の授業の予鈴が鳴り、席へと急いだ

そして放課後

体育館へ向かう途中先輩達の背中を見つけ緑間を置いて駆け出し
た

「未来先輩!!」

「お前は何時でも元気だな」

宮地さんと口喧嘩をしていた未来先輩はそう言って隣にならんだ
俺の頭を撫でた

「へへっ、未来先輩！今日部活見に来てくれるんすか!？」

「あー、中谷先生と合宿の話をしに行くだけだ」

「えー!!見てっ下さいよー！俺今日は頑張っちゃいますんで！」

「高尾はいつも頑張ってるんだろ？アイツ等から聞いている」

「へ？」

未来先輩が指差すのは後ろを歩く大坪さん、木村さん、宮地さん
先輩達に褒められるのは悪い気はしないがなにより照れくさかつ
た

しかしそれも束の間、また痛いほど殺気の籠もった視線が背中に突
き刺さり思わず肩が震えた

「高尾？」

そんな俺に気付いたらしい未来先輩は俺の顔をのぞき込んできた

「なーんでもないっす！」

「つちよー！」

未来先輩の手を掴んで体育館へ走り出すと後ろから宮地さんの罵声飛び振り返った

「へへーん！未来先輩は俺が貰った！」

なんつって！と続くはずだった言葉は全力で走り出すことで口からは出て来なかった

だってよ阿修羅とか般若みたいな顔した宮地さんが追っかけてくるんだぜ？

逃げるだろ！！普通に！！

「ちよ、高尾、早っ」

「待てこら高尾！テメエ殺す！」

「すみません！未来先輩！！つか殺すって言われて待ってますか!？」

結局体育館前で投げられたパイナップル：じゃなくて開けてないペットボトルが頭に直撃して思わず頭を抱えてしやがみこむ

キ、キャップは反則っしょ…！！

「ほらよ」

「あ、サン、キュ、宮地」

そのペットボトルは膝に手をつけて息を整える未来先輩に渡し宮地さんはバツと背を向けた

その顔はちよつと赤くなって気になってチラリと後ろを見ると全力疾走のせいでうっすらと涙を浮かべ赤く上気した顔を傾げて宮地さんを見上げる未来先輩

つまり…

「ぶふあっ！宮地さんってば！」

「う、うるせえ！高尾シバく！」

ニヤニヤしていた俺は全力で宮地さんにシバかれた

月島先輩を連れて行った高尾を追いかけて行く宮地さんに唾然と
していると大坪さんと木村さんが苦笑していた

「アイツも本当素直じゃねえな」

「見ていてもどかしいな」

2人の口振りから高尾の言っていたことは本当なのだろう

それよりも…

「いつからあんな感じなんですか？」

見ていてムカつきますとペットボトルを投げた宮地さんを見なが
ら言うと木村さんに笑われた

「宮地に言ったらキレられるぞー！そうだな…月島と俺らが会ったのは
1年の夏前くらいだな」

「ああ、最初は気にかけるくらいだったが、間違いなく2年の夏までに
は変わってただろう、月島は…：どうだろうな」

…いつもの厳しい大坪さんと違いなんだか父親のような優しい目
線でペットボトルを月島先輩に渡す宮地さんを見る大坪さん

「見ている感じでは気づいてる様子は無いのだよ」

「しよっちゆう喧嘩してるからな」

「…言おうとは思わないんですかね」

「あくそれな…」

高尾をシメる宮地さんを見、木村さんは苦笑しながら語ってくれた
なんでも去年の夏に月島先輩に告白をした男が宮地さんをどう
思っているのかを聞いたそうだ

まあ黙っていれば黄瀬似の美人だしそういうのがいるのも理解で
きるのだよ

まあそれが偶々体育館裏で木村さん達3人は丁度休憩に入り会話が
聞こえたそうだ

で、その時の言葉が「は？なんで宮地？別にどうもしねえよ。口わ
りいいし、短気だし、デケエし、俺様だし、ムカつくし、…でもまあ、
あっちがどうかは知らねえが気は合う方だとは思ってるし…まあ親
友とか？あと大坪と木村もな」だそうだ

「それで、今の関係が崩れんのが怖くなって今に至るって感じだな」

「正直、俺らもそう思われてんのは嬉しかったが」

「あん時の宮地は荒れたな」

「木村は当たられてたもんな」

「まあおかげで宮地の気持ち知ったよ」

「宮地の気持ち？」

「……」

いつの間にか近くに来ていた月島先輩に3人して肩を揺らした

「図体でけえ男がそろいもそろってビビんなよ、うっぜ」

そう言つてペットボトルに口を付けるあたり自分の話だとは理解していないようでほっと内心息を吐く

「つか早くしてくんね？帰れねえ」

体育館を指差して大坪さんを睨みつける

大坪さんは悪いなと笑い、月島先輩の頭を撫で体育館を開けに行く

月島先輩は撫でられた頭に手を置き、眉間にしわを寄せて木村さんを見た

「…木村、あいつ何？親父みたいでキモいんだけど」

「それ絶対大坪に言うなよ、あいつ意外と繊細なんだぞ」

そこへ宮地さんが月島先輩の悪口を言ったのが聞こえ、月島先輩の額に青筋が浮かび顔に影がかかる

「緑間ア、その金槌貸せ」

「あえて聞きますが、何に使うのだよ」

「宮地の頭かち割るに決まってるだろ」

「貸せませんよ」

「落ち着け月島！」

自然と月島先輩から離れると間に木村さんが間に入り落ち着かせる

月島先輩は宮地さんを振り返りペットボトルを投げた

「飲みかけじゃねーかよー！」

「もういらねーから返したんだろうが…んでキレんだよ」

「は!?!」

「宮地さんってば未来先輩と間接しうぎや！」

「テメーは黙ってる高尾!!」

とりあえず、高尾は宮地さんをからかうという遊びを手に入れたのだよ

未来 side

「月島は1人部屋ね」

「じゃなかったら行かないっす」

バスケット部がストレッチを開始し始め、中谷先生に合宿の事を聞いた合宿は1軍分の3食を作ることをメインに出来ればマネ業もやってほしいとのこと

…実に面倒くさい

お風呂は露天もあるらしくテンション上がった

「あとはそのプリントに書いてある。食事時意外はまあ何してても構わない」

出来れば体育館にと付け足す中谷先生に重いため息をつく

「わかりました。マネ業もちよつとやりますよ」

「すまないね」

ちよつとを強調して言ったがあまり気にはされず、何故か柔軟で悲鳴をあげる高尾の声をBGMにプリントの束をめくる

宮地さん！それ人間的に無理つきやー！や無理無理無理つくく！！
声にならないくらい痛いらしい、というよりやりすぎだろ宮地

それはさておき、マネなんかやったことねえし、何すんのかわかんね……………プリントにマネの仕事まで書いてやがる

「この練習量じゃご飯3杯くらいがノルマか」

「食事に関しては月島に任せる。栄養が偏らなければ良いさ」

「…了解」

え、これ相当早起きしなきゃやばい感じじゃね？つまり、すっぴんさらす感じ？

夜は一番遅く入って部屋に籠もって…やば睡眠時間が…

「…1日目は仕込みとかでマネ業出来ないんで」

「構わんよ。他に何か質問はあるかな」

「ないっす」

話はこれで終わりとなり立ち上がると背骨がポキポキなった

後数週間だしメニューとか考えとかなきゃ面倒だな

合宿よろしくお願いしますと言って体育館から去ろうとして、肝心なことを聞いてないと思い振り返る

「あ、食材はどうなってます？」

「前日に言ってくれば私が用意する。お米はあるし、野菜は木村の家から少し安くして頂くことになっているから心配はない」

「わお、宮地の武器が盛り沢山」

「おーだから背後には気をつけろよ未来」

「わかった、宮地だけ飯抜きな」

突っかかってきた宮地、脇で床にぶっ倒れてる高尾を気にしながら真顔でそう返すと棒読みだか謝られた

ザマア見ろ、お前等の胃袋は私が握ってんだよ

宮地 side

あの後、高尾が無理に未来を引き止め結局部活が終わるまで残っている未来は一目で分かるほど少し不機嫌だ

ため息をつきボールを取り出すと高尾が寄ってきた

「宮地さーん」

「んだよ高尾」

「今日は居残り無しって監督が言っていましたよ！」

「マジか」

「マジっす」

なんてこった

仕方ないからボールを片付けようとする高尾はニヤニヤしながら俺の周りをチヨロチヨロする

「高尾うぜえ、お前緑間はどうした」

「宮地さん酷いっすよ！別にいつつ一緒にいる訳じゃねえっすよ緑間とは！宮地さんってば何言ってるんすか！あいつ今日は居残りできねーからストバス行くらしいっす！」

「うぜえ轢く！」

「そのスコアボードで!?持ち運び楽チンお手軽武器つすね!」

「よし轢く」

俺がそう決意しスコアボードをもつ手に力を込めると未来が高尾の名を呼んだ

「早くしろ腹減った」

「は?何、お前等どっか行くの?」

「高尾の奢りで飯」

サラッと答える未来に若干イラツとしながらふーんと鼻を鳴らす

「なら俺にも奢れ高尾」

「何故に!」

「普段の迷惑料に決まってんだろ」

「ちよ辛辣!!」

高尾がゲラゲラと笑いながら安くお願いしますと言ったのでさっさと片付ける

大坪や木村も誘ったが2人は断り途中まで一緒に帰った

そして3人で入ったのは学生に優しいファミレス

高尾が何にしよつかないとメニューを開くと未来は席を立った

「宮地、いつもの頼んどいて」

「はいよ」

未来の姿が見えなくなると高尾はメニューを立てて体を乗り出してきた

「先輩達って良く来るんすか?」

「まあよくテスト勉強とかしに来るな」

そう答えながら、呼び出しベルを鳴らすと高尾が焦る

「ちよ!まだ決めてないっす!」

「わりいな、俺らはいつもこんな感じだから、早く決めろよ」

結局俺が頼んでる間に決めたらしくギリギリで頼み、ドリンクバーに直行し未来と一緒に戻ってきた

軽く部活や合宿の話をしたり、ミックスジュースを作ったりしながら食事を終え、帰ろうとすると高尾はトイレへと席を外した

「ほら」

「あ？」

「払つといて、後輩に奢らせるほど腐ってねえから」

そう言つて紅茶に口をつけながら伝票とお金を出してくる未来に伝票だけを受け取り荷物を持って立ち上がる

「悪いが、俺も後輩や女に奢らせるほど腐ってないんでね」

「は、あ？いや自分の分くらい」

「うるせえ！女は大人しく奢られてろ！…高尾来たら来いよ」

そう言つて席を離れた俺は未来がどんな顔をしていたかなんて知らない

高尾 side

トイレから戻ると席には未来先輩しかおらず宮地さんは荷物ごといなかった

「あれ、宮地さんは？」

「会計」

「ええ!?ちよ、俺の奢りつて言つてたのに!!」

未来先輩は頬杖をつき俺から顔を逸らし紅茶を口にする

俺は席に座り残りのジュースを流し込む

「ぶはつまじ宮地さんイケメン！男前すぎるんですけど！奢れつて言つてたのに！自分が奢つちやうとか！」

「本当にな」

「へ？」

思わぬ返答に動きが静止するも未来先輩の顔をそつとのぞき込むと見んなどメニューで顔を叩かれ、前が見えない

チラッと見えた未来先輩はちよつと赤くなつて

「え、もしかして未来先輩…」

「黙れ殺すぞ」

「ガチトーン!!」

サツと背もたれに寄りかかり距離を取れば未来先輩は額に手を当てため息をついた

「私こんなだからさ、よく喧嘩ふっかけられるし、恨みも買ってるから…友達とか作らねーで、こいううのも避けてたんだけど…」
「ど?」

「私にこいうゆう楽しみ教えたくれたのアイツでさ…アイツの近くにいるのが楽しくて、さ…いつの間にか」

「好きだった?」

「っ!!」

効果音が付きそうなくらい顔を赤くさせた未来先輩は両手で顔を隠し顔を背けた

そこにはいつもの迫力は無く、1人の恋する乙女で

俺は未来先輩の手を取り目をまっすぐに見た

「未来先輩!!俺、未来先輩の事お姉ちゃんって感じですよー好きだし、宮地さんも好きだし、2人には幸せになつて貰いたいんでめっちゃ応援します!!」

「高尾…」

「だから何かあつたら相談して下さいね!!」

きよとんとしていた未来先輩は綺麗に微笑んだ

「ありがとう高尾。じゃあ行くか、宮地がキレる」

「うわっそれはいやっす!」

未来先輩と急いで店を出ると思つた通り機嫌の悪い宮地さんと未来先輩がいつものように口喧嘩を始める

いつもと違うのはそこに俺が間に入る事

「ほーら…こんなところで喧嘩しないで帰りましょうよ!」

「おい!」

本当にそっくりな2人だな

間に入り、2人の腕を組み歩き出すと未来先輩はフツと笑い、宮地さんもなんなんだよと文句を言いながらも腕を振り解こうとはしなかった

未来 side

た
2人は私をバス停まで送り、バスが来るまで一緒に待っていてくれ

「じゃあまた明日な」

「おー」

「未来先輩気をつけて下さいね！お疲れさまですー」

高尾は最後まで元気だな

ドアがしまり窓から2人に軽く手を振るとバスが発進し席につく

バスの中は私以外誰もおらずちよつと不気味だった

最寄りの駅で降り、家まで歩いていると誰かにつけられているのを感じた

めんどくさいと思っていると公園を通り過ぎようとした時に声をかけられた

「おーい!!月島ちゃん!!」

「…誰かと思えば、負け犬じゃん」

名前は…忘れたがいつも突っかかってくる頭の弱い女

挑発すればすぐに頭に血が上る

「つてメエいつまでも調子乗ってんじゃねえ!!おい!!」

「!!」

公園ないには仲間らしき人がわらわらと出てきた…男も混じってんじらんか

それに小さく笑いアイツを見た

「団体なら勝てるって?」

「ふん!!やっちゃいな!」

そんな掛け声と共に一斉にかかってくる

すべてかわして公園を出る…思ったより人数が多すぎる!

後ろから追いかけて来る奴らを撒こうとフェンスを勢いで乗り越えると反対側にも奴らが現れ足を止めた

「はあ、はあ、追いつめたぞ月島!!」

「体力ねえなお前」

殴りかかってきた男の拳を避けると勢いを殺せずフェンスに激突し気を失った

アイツ等との約束が脳裏を過ぎったけど、これじゃ無理だ…幻滅されるかもな…

「逃げんのはもうやめる。全員、ぶっ潰してやるから来いよ」

「いって」

あれから数時間後

駆けつけた警察から逃げ切り、風呂に入っていた

戦った中に男が数人いたせいでいつもより傷を作った

つか男が顔殴んなよ

押さえつけられたり、やばそうになったりもしたが蹴り上げることで回避

でもアイツ等の触った感触が残ってて気持ち悪い

「あ、明日うるせえんだろうなアイツ等…あ、高尾、緑間もか」

毎回喧嘩するたび保護者かと突っ込みたいくらい心配して来た3人を思い出す

1人は喧嘩腰だが…

そして私を姉のようだと言った高尾と何気に母親属性の緑間もそこに加わるんだと思うと気が重くなった

、喧嘩をしない」

3年になり上級生から絡まれなくなった時に3人と約束したこと「わりい破っちゃまった」

湯船に沈み、目から流れた物は無かったことにした

宮地 side

朝練を終え教室へ戻る途中沢山の生徒が共通の話題で持ちきりだった

「喧嘩したみたい」

「今年入ってから無かったのに」

「喧嘩しなくなっただと思っただのに」

「俺はまたすると思ってた」

「……………」

なんだかアイツな気がして3人で顔を見合わせた

途中、未来の教室を一瞬だけ覗いたが姿はなく、不安に思いながらも午前中の授業を終えた

そして昼休み、俺は屋上へと走り扉を勢い良く開け屋上を見渡す

姿が無いことを確認し、扉の横の梯子を登ると

「いやがった」

そこには鞆を枕にし眠る未来の姿

その顔にある痛々しい傷を見て自分で眉間にしわが寄るのがわかった

未来の横に腰を下ろし顔にかかる髪をのけてやる

「っん」

傷に触ったのか未来は身じろぎをしたが、猫のように俺の手にすり寄ってきた

なんとなくそのまま撫でていると扉が開く音がした

「宮地いるか？」

「月島いたか？」

大坪と木村だ

木村は梯子を登って来ると俺と未来を見てニヤリと笑った

「木村キモイ、ぶっ殺すぞ」

「軽トラ貸さないからな」

木村がそう言うって梯子を降り大坪と話し始め、俺が舌打ちすると共

に再び扉が勢いよく開いた

「あ！大坪さん！木村さん！未来先輩は!？」

「うお!？高尾!？落ち着け!!」

「未来先輩の顔に傷つてなんすかあああ!？」

「やめ！高尾、酔う…」

下を覗き込むと高尾が発狂したように木村の肩をつかみ勢いよく揺らし騒いでいた

その後ろにいる緑間もどこかそわそわしていた

「おい未来」

死にそうになっている木村を見て、後ろで眠る未来を起こす

「んあ?…:…あ…:宮地?」

「そー宮地。早く起きろ、その怪我の説明しろ」

「あ…:」

起き上がった未来はぼつの悪そうに乱暴に頭をかいた

梯子を降りた未来に高尾はうわあんと言いながら抱きついた

「未来先輩の顔に傷があ!!」

「まったく、女性が顔に傷など作るものではないのだよ」

「高尾落ち着け大丈夫だ。緑間なんかムカつく、刺していい?」

「嫌なのだよ」

今のは高尾じゃなくても分かる

緑間も噂聞いて心配したんだな…:眼鏡を直す回数が多い…:取りあえず

「高尾いい加減離れろ」

「…:はあい」

意外と素直に離れた高尾に内心驚きつつも未来に問う

「なんでやりあった」

「…:正当防衛だあんなん」

フィツと視線を逸らした未来に苛立ち何か言おうと開いた口は木村に抑えられた

「今口喧嘩してる場合じゃねえ」

「…:」

「はあ……取りあえず月島。詳しく教えてくれ」

大坪の問いに渋々と言った感じで月島は昨日、俺達と別れた後の話をし始めた

未来 s i d e

「……」

「以上」

座りながら昨日の事を思い出しながら話すと目の前にいる男達は皆表情が違うものの無言のまま私を見ていた

やっぱ幻滅されたか……

そう思い立ち上がると高尾が再び引つ付いてきた

全力で押し返すもびくともせず更に腕に力を込めてきた

「たか「…さい」

「え？」

「助けを求めて下さい。助けてって一言……未来先輩一人で頑張りすぎ……」

「別にそんな」

肩に顔をうずめる高尾に困惑していると大坪が頭を撫でてきた

「高尾の言うとおりだ。いつも言ってるだろ」

「そうそう。俺達友達だろ？分かってるか？今凄く泣きそうな顔してる」

「っ！」

木村の言葉に目の奥が熱くなったと思ったらそれは頬を伝った

「不器用ですね月島先輩」

「お前にだけは言われたくねえよっ」

緑間にそうツッコむと大坪達は笑った

そんな中、宮地は笑いもせず低い声で名前を呼んだ

高尾も私から手を離し宮地を振り返る

「お前俺んちから通え」

「「あゝ」」

真顔で何言ってるんだコイツ

頭可笑しくなったかと突っかかるもいつもなら何かしら文句言ってくる宮地が顔色一つ変えなかった

「未来のバイク、うちに置いといて良いからバイクで通え。そうすりゃ絡まれねえだろ」

「宮地……でもそれじゃ宮地が目つけられんぞ」

「構わねえよ、そこまで弱いつもりはない」

「私が構うんだよ!!」

大声を出せば高尾がビツクリしたように少し離れ、宮地以外が目を丸くした

「絡んでくんのは女ばっかじゃねえし！暴力をふるう事が当たり前のやつばっかだ！」

「……」

「私は……私は！お前達がバスケットを本気でやってるの知ってるから……お前達がバカみたいにバスケットの話してんのが好きだから!!巻き込みたくねえんだよ！合宿は行く、だから無駄に関わるな!!」

言い切った私に呆然としている皆

私は屋上を走り去った

後ろから聞こえる声を無視して

宮地 side

高尾が未来を呼び止めようとするもアイツは屋上を去る

俺は後ろへ倒れ空を見上げた

「アイツ、あんな事思ってたんだな」

木村が屋上の扉を見ながらそう呟くと大坪も頷いた

「前よりバスケットの話を楽しそうに聞いていたからな、そう思ってくれていて良かったがとは思うが……」

「確かに月島先輩の言うとおりです。暴力沙汰は出場停止になる危険があるので避けたいのだよ……だが」

「それでもアイツを一人になんか出来ねえよ……ん？」

大の字に寝っ転がりながら言う俺の顔を高尾がのぞき込んできた

「なんだよ」

「未来先輩、追いかけていいんすか」

「いーんだよ。あいつの行くとこなんか分かってるし鞄もおきっぱだ」

「ふーん、愛の力は無限大っすね！」

場の空気が固まった

数秒たち、俺の頭が高尾の言葉を理解すると同時に起き上がり高尾につかみかかる

「テメ「ぶふお！宮地さんってば！か、顔真っ赤!!」

高尾に指摘されフラフラと後退しフェンスにぶつかる

高尾が爆笑し転がってる間によく見れば木村や大坪も笑ってるし縁間も顔を背け肩を揺らしている

「っ高尾！テメエ殺すぞ!!」

「無理っす！その前に死ぬ！笑い殺される!!」

死ぬ、笑い死にでもいいから死ぬ！

顔を見られないよう背を向けフェンスに手をつきずるとしやがみ込むと更に五月蠅くなった

未来 side

屋上を飛び出した後、いつもの空き教室で机にのびた

自分から居場所を離れるのは慣れてるが今回は一緒にいた時間が長すぎて、楽しくて、離れたくないか思い始めて…辛い

ああ、鞄忘れた

後で取りに行こう

そう思い目を瞑れば意識は沈んでいった

ふわふわと水の中を沈んでいく私の身体

泡が浮いていくのを見ていると段々光が小さくなって暗くなっていく

不安になり浮いていこうと思うと底の方から伸びる複数の黒い手

が私を掴む

もがく私を下へ下へと引つ張っていく

消えゆく光に無意識に伸ばした手には温もりを感じた

「っあ…」

「ん、起きたかよ」

掴んだのは宮地の手だった

「んで、いんの」

「もう部活終わったし、お前の鞆もったままだし、探しに来てやったんだよ。感謝しろ」

手を離し体を起こして窓の外を見れば空は橙色が暗く変わり始めていた

「なんで…鞆置いときやいいじゃん」

「ほっとけねえからな」

そう言つて宮地は手を伸ばし、私の頬に触れた

そして親指で目元を撫でる

その指は黒くなり、そこで私は泣いていたことに気付いた

「怖い夢でも見たか？」

「……うん」

「そうか」

手は頭へと移動しゆっくりと撫でた

暫くそのまま無言でいると手が離れた

「帰るか」

そう言つて立ち上がり私に手を差し出す

私は頷いてその手を取った

一定の距離を保ったままずっと無言で歩いているとふと思ったことを口にする

「突き放したのに、なんで関わろうとすんの」

「はあ…あれで突き放してたのか、俺には逆に手を伸ばしてるよう

に聞こえたけど?」

「え…」

「未来はさ、結局俺らといるのが好きなんだろ」

宮地の言葉に少し間を開けて小さく頷くとだったらしいじゃねえかと私を振り返った

「未来が無理することねえよ、大坪や木村、高尾や緑間だって未来にいて欲しいんだから」

「……」

「また無理にでも距離取ろうとしてみろ、そんな時はアイツ等とどこまでも追いかけてやる」

その目はまっすぐに私の目を見ていてその瞳に吸い込まれそうになる

すると宮地は私の腕を取り歩き出した

「家まで送るからちよつとうち来い」

「はあ?」

「チャリで送るんだよ、文句あんなら轢くぞ」

普段通りにの宮地に戻り、内心安心すると腕を離し手を繋いだ

「チャリで轢くってんなら、バイクで轢き返す」

「お、調子戻ったな」

握り返してくれた事に安心し、手を繋いだまま宮地の家を目指した

宮地の母親に彼女に間違われるという事件がありながらも(2人で全力否定しといたが微笑ましそうに見送られ) 帰路についた

宮地の後ろに座り、その背中を見ていた

「宮地さ、本当に身長伸びたよね」

「あ?あーまあな」

「会った頃私とそんな変わんなかったのにな」

そう言うのと宮地は絶対わざと自転車を蛇行させた

バランスの崩れた私は咄嗟に宮地の腰に腕を回ししがみつく

「つぶねな!」

「そりや悪いな!次は?」

「悪いと思っただろ…あそこ右で道なりにずっと行って突き当た

りの家」

何だか面倒になったのでそのままの体勢で道を言うと返事が帰ってきたので背中に頭を預ける

宮地も文句言わずに受け入れたから調子のとってそのままだった

家の前につき自転車から降り宮地と向き直る

「ありがとう。明日からよろしく」

「おお。じゃあ」

「それと、さ…」

帰ろうとした宮地の袖を掴み引き止めると宮地は首を傾げ真っ直ぐに見つめてくる

自転車に跨ってるから視線は同じくらいだ

思わず視線を逸らしたが、息を一つ吐き見つめ返す

「もう…今度こそ卒業まで喧嘩しないから」

「未来…」

「絶対に手…出さないから」

宮地はフツと笑って私の頭に手を伸ばしてきた

「わかった。ただし、また昨日みたいに襲われそうになったら一発かまして逃げろよ？最後までやられたんじゃ約束した俺のせいみたいで嫌だからな。学校に猛抗議しに行つてやるよ」

心配そうにのぞき込んできた宮地の言葉にわかったとふにやりと笑った

「ありがとな宮地。じゃあまた明日」

「おう」

今日はよく眠れそうだ

高尾 side

「明後日は実力テストやるぞ！点悪い奴は夏休み補修やるからな！」
「…………げ」

I・Hの終わった俺らに待っていたのは実力テストという地獄でした

放課後、部活はないが大坪さんに2階の空き教室に集められた
持ち物は勉強道具

「いいか。夏休みの補修は合宿とかぶる。補修なんかになったら…分
かってるだろうな」

「はい」

「……………はい」

やっぱり話題は実力テスト

間の空いた俺の返事に何故か先輩達の視線は俺に集まった

「緑間は大丈夫そうだが…………おい、高尾。お前」

「だ、大丈夫ですよ！今までなんとかなってますし！」

「この前世界史の小テストで赤点だったのだよ」

「ちよ！真ちやーん!？」

弁解するも先輩達…と真ちゃんの冷たい視線が俺に突き刺さる

「なら、適当に問題出すから答えてみ…………」

大坪さんはそう言っつて俺の教科書を開いて固まった

宮地さんと木村さんもそれをのぞき込んで他の教科書も開く

あ、やべ。教科書にはさみっばなしだ

「おい高尾…………なんだこの点数」

「て、てへぺろ」

目の前に広げられたバツばかりの小テスト達

思わず可愛らしく誤魔化そうとしたら宮地さんに無言でヘッド
ロックをかまされた

…やめて！俺のライフはもう0よ！

「……なにしてんの」

「っ未来せんぱーい!!」

教室の入り口から現れた未来先輩に宮地さんの腕がゆるみ、その隙に抜け出し思わず泣きつけば宮地さんが首根っこを掴みすぐに離れた

「…勉強するんじゃないかったのか」

「いやする…それよりも高尾がな」

宮地さんは俺を見下ろして黒く笑った

あー俺死んだかも

「よし、こんだけ出来れば大丈夫だろ」

大坪さんはワークの点数を見て頷いた

宮地さん達にしごかれた俺は疲れたのと安心したので机に突っ伏す

名前を呼ばれ顔だけ上げると目の前に飴が差し出された

「食つとけ高尾……あ、宮地そこ違う」

「はっどいっ？」

「だからっ。っここは……」

いつの間にか2人で勉強を始めていた未来先輩と宮地先輩

飴を口に放って首を傾げると木村さんが近寄ってきた

「あいつらいつも上位争ってんだよ」

「上位!?マジっすか!？」

「意外なのだよ」

いやあほんとに

人は見かけによらないんだな…

びつくりして2人を見ていると同時に振り返った

「何?」

「…こういう時は喧嘩にならないんすね」

いつもならハモるとすぐに言い合いになるしと思いきや口にする
と俺が可笑しいみたいなの顔をした

「いや勉強くらい静かにやりにえし」

「あれは口論の中だから言うことだもんな」

「…そういうもんっすか？」

「そういうもんっす」

もうお前ら付き合えよ

と思ったのは俺だけじゃないと信じた

そして実力テストは平均以上取れたから補修は回避できた

そして先輩2人は同点でまた口喧嘩が始まったのは言うまでもな

い

宮地 side

1、2限目は未来のクラスと合同の体育で種目は…
「ドッジボール…」

明らか高校生が授業でやるもんじゃねーだろ!!

そう言うの大坪と木村も頷いた

何考えてんだ体育教師!と体育教師を見ると両クラスの担任に挟まれてた

「私のクラスの方が優秀です!」

「私のクラスだつて負けませんよ!」

そうか、原因は担任ね

「轢くぞアイツ等……」

何故かハモった声に隣を見れば未来が同じように俺を見ていた

体育だから髪を高く結い上げてる未来を見るのは初めてで何だか新鮮だ

「お!月島!」

「珍しくやる気だな?」

「当たり前だろ。ドッジボールだぜ?こいつの顔面にたたき込めるんだから参加すんだろ」

そう言つて羽織つていたジャージを腰に巻き指さすのは俺

ははーこいつ轢いていい?

「未来、残念だが顔面はセーフだ」

「マジか、何回もたたき込めるな」

「いや、そこは諦めろよ!!」

真顔で喜ぶ未来に木村の突っ込みが入った

つか体育館にいとバスケしてー

そう思つて天井すれすれまで上げられているゴールを眺めた

「ゲーム開始!!」

体育教師の声と共にボールが投げられた
ちなみにボールは3つだ

俺と未来は外野スタート

未来は座り、俺は壁に寄りかかって2人して雑談をしながら試合を
傍観している

着々と人数が減っていき俺は中へ入るよう言われ軽くストレッチ
未来のクラスもチラチラと未来を見ている

「…お前クラスに友達いねーの？」

「いるかよ」

そう言っ立ち上がり俺を指さしてきた

「その顔面叩き込む」

「はっ！やってみろ」

俺らが中に入り3対5で俺ら優位

未来が外野からのボールを受け取り投げた

それなりにスピードのあったボール

俺の隣にいたやつが鈍い音をして当てられた腹抱えながら外野に
向かう

ボールで手の上で遊ぶ未来をチラリと見れば目が合いニヤリと笑
われた

「やるじゃねえの!!」

そして俺と未来の戦いが始まった

「いい加減にしろ殺すぞ!!」

「やってみろ！その前に轢く!!」

「テメエなんか轢かれるかよ!!チビ!!」

「ぜってーその女みてえな顔面に当てる!!」

「ぶっ殺すぞテメエ!!」

互いに罵声を飛ばしながらボールを投げる

まわり？互いに巻き込まれて2人しか残ってねえよ

外野も応援でそれなりに盛り上がってる

「月島さん!!宮地君に色仕掛けでもしてみたら!!」

「うおー!!」

向こうのクラスの子がそう叫ぶと男子が盛り上がった

まあこいつは黙ってりや綺麗だし良いアイデアかもしれないが

「誰がやるって分かってる色仕掛けなんかにかかるかよ!!」

視界の端で大坪と木村が呆れたような顔をしてるのが見えた

木村 side

「宮地馬鹿だな」

「ああ馬鹿だ」

宮地の投げたボールは月島が腹に抱え込んで受け止め、後ろによろけた

これで脇に2つあるから月島がボールを全部持っていることになった

先程月島の口が弧を描いたから色仕掛け、やるんだろうな

「酷いわ清志…あんなところ見たくせに、あんなことしたのに、そんなこと言うのね」

「っ!」

おっと名前呼び来た

というより…おい誰だあれ

ボールをギュツと胸元で抱え涙目で見上げているその顔は少し赤みが増し

うん…なんかエロい

案の定宮地は静止した

寧ろ体育館全体の音がなくなり誰かがゴクリと喉を鳴らした音が聞こえた気がした

月島はボールを抱えながらセンターラインへゆつくりと近づく

それに比例して宮地も一歩ずつ後退する

いつの間にか解けていた髪を耳にかけ頬に手を当てながら見たことのない顔で宮地を見つめ

月島が笑った

「ハッ宮地のバアーカ!!」

「ぶっ!!」

投げられた豪速球は宮地の顔面に当たり大きく跳ね上がった…つて顔面!?

「あいつマジで顔面行きやがった!!」

「おい顔面セーフだぞ!!」

外野が騒がしくなり顔面を押しさえよろよろしていた宮地は降ってくるボールを受け止め大きく振りかぶった

その顔は耳まで真っ赤だった

「未来テメエ!!…っ」

隙だらけの宮地の腹に軽くボールが当たり地面を跳ねた

投げたのは勿論月島

「私達の勝ち」

宮地は膝から崩れ落ち頭を抱えてうずくまった

そしてチャイムが鳴り昼休みへと突入した

担任達にはらみ合いながら、体育教師はそれに巻き込まれながら体育館を去り自由にする俺達

月島はからかいに行こうとしたのだろうがあっと言う間にクラスメイトに囲まれていた

「凄いいね!月島さん!」

「あの宮地をあんなにするなんてな!」

「ソフト部来ない!」

「ねー何かやってたの!」

「え…、う…:…木村!!」

今までこんな風にされたこと無かったのかとても戸惑い、助けを求められた

「せつかくだから仲良くなっとけよ。クラスメイトと」
「っ…」

すると月島のクラスメイト達がハツとした

そして

「「いめんなさい!!」」

一斉に頭を下げた

その様子に俺らのクラスの奴らも頭を下げた

「噂信じちゃったけど、全然冷酷じゃないし、目があったら喧嘩するとかポ○モンかって感じよね…」

「まあ口悪いけど宮地とどっこいどっこいって感じだし」

「今まで避けててごめんなさい！今から…友達になつてくれますか？」

皆の視線を一気に受け月島は戸惑いながらも頷いた

「でも、あまり学校外は…変なのに絡まれるし」

「オツケー!!学校内だけベツタバタに構うからな!」

わいわいと楽しそう話す皆を見て大坪と顔を合わせて笑うと、今だうずくまる宮地へと近づきしやがみこむ

「おーい、大丈夫かー」

「宮地?」

「……」

チラリと見えた耳は未だに赤かった

「馬鹿だろお前」

「うるせ」

大坪 s i d e

「おい宮地」

「何?」

「いや何じゃなくて、箸逆だから」

「……」

昼休み、いつもの様に屋上での食事

いつもと違うのはそこに月島の姿がない事

それに宮地がぼーっとしている

「どうしたんだ宮地」

「いや別に」

箸を持ち直し、食事を続ける宮地

もしかして月島がないから気が抜けてるのか?

それか月島の事を考えているか…

「月島は…」

名前を出した瞬間、ビクウウツと大きく肩を揺らした宮地に木村と顔を合わせ苦笑した

「お前なあ…少しは我慢しろよ。いつまでも俺らの中だけにいるわけにはいかないんだからさ」

「わーってるよ」

「…もしかしてさっきの時間のこと気にしてるのか？」

「っ!!」

顔を赤くし背を向けた宮地、木村がニヤニヤとそれを眺めていため息をつくと屋上の扉が開いた

「あり？未来先輩いないんすか？…って宮地さんどうし…ぶふう!!また顔赤いっすよ!!未来先輩いないのにどうしたんすか！」

顔を出したのは高尾で1人背を向ける宮地の前に回り込むと噴き出した

木村がちよいちよいと手招きをし高尾は走り寄る

「実はな」

「木村あああ!!テメエ刺すぞ!!」

「大坪！抑えといてくれ！」

「わかった」

「大坪おおお!？」

箸を握りしめ暴れる宮地を抑える

手足が動けないのが分かると暴言を吐きまくる

そしてあらかた話終わったのか木村はすつきりとした顔でふるぶると震え、地面に転がる高尾を見ていた

「む、むり…ひっ、し、ぬ…ふひっ」

呼吸困難に陥ったようだ

宮地も何故かぐったりしてる

「…何この状況」

「月島!？」

いつの間にか屋上に来ていた月島は変な物を見るような目で俺達を見ていた

宮地の体がピクリと動いた

「ど、どうしたんだ月島、クラスで食うんじやなかったのか」

「いや、食い終わって遊びに出るつつうからだるいしこっち来た…つか高尾と宮地どうした？」

「……だろ……」

宮地が何かを呟くが小さくて聞こえないので腕を緩めると、一瞬にして飛び出し、月島に跳び蹴りをする

「お前のせいだよ!!死ね!!」

「うお!?いきなり何なわけ?うつぎ」

華麗に避けた月島は体勢を整える宮地を睨みつけ、2人同時に胸倉をつかみ合った

「うるせえ!!殴んぞ!!」

「なら一発目から当てて見ろよ!!へボ!!」

「こんの、がさつ女!!」

「ヘタレ!!」

「男女!!」

「女顔!!」

「ブス!」

「ハゲ!!」

「ハゲてねえ!!刺すぞ!!」

「その箸でか?バカじゃねえの!?!」

いつものように口喧嘩を始めた2人

よろよろと木村に支えられて来た高尾に水を渡す

「あ、ぎっす」

「つか、言い合つてるとあんだけ近くても良いんだな」

そう、2人は互いに胸ぐらをつかみ合い鼻がつきそうなぐらい接近している

それに高尾が水を噴き出した

お、虹だ

未来 side

とうとう明日から合宿

少し楽しみにしながら家につくとリビングの電気がついていて顔から表情という表情が剥がれ落ちたのがわかった

家に入り、リビングを通りかかると声をかけられる

「あらお帰りなさい」

「……帰るなら連絡寄越せよ」

「やーね、私の家よ？いつか帰ってきてもいいじゃない」

こいつが自分の母親だなんて信じたくもない

4年ぶりの帰宅にも関わらず私の方を一切見ず、パソコンのキーを叩いている

冷蔵庫から冷やしていた紅茶を取り出し一口飲む……うん美味しい

「そういうえはもう夏休み？ちよつと明日手伝って」

こいつは仕事人間でいつも海外転勤で家にはいない
家に帰ってくると直ぐにこれだ

私はこいつが家事をしているのを見たことがない

父親は耐えきれず、私の弟が産まれて1年で別れたらしい……なぜ私も連れて行ってくれなかった

写真でしか見たことない父親に舌打ちをし背を向ける

「明日からいねえから」

返事を聞かず風呂に入る

自分の部屋へ戻りベッドへにダイブして卓上にあった写真……家族が4人映る写真を手に取る

「……バァカ」

笑顔の父親にそう吐き捨て卓上に戻し明日の荷物を確認して眠りについた

「……っは」

駄目だ…自分以外の気配がありすぐに目が覚める

…あれ、これじゃ合宿中寝れなくね？

そう思いながら目に入った人形を抱きしめ寝転がる

一昨年、宮地達にUFOキヤッチャーで取って貰った抱き枕大の猫の人形

それを抱いていると段々と瞼が重くなり自然と眠りについた
もう日が昇り始めているのに気づかず…

「……やば」

寝坊です

とりあえずショーパンにTシャツにパーカーを羽織りサングラスと荷物をひつつかみ階段を下りると目の前にアイツが立ちふさがった

「あらどこ行くの？ちよつとこれ手伝いなさい」

「了承した覚えはない」

「生活費稼いでるのは私よ？少しは手伝いなさいな」

あーヤバいキレる

「黙れ!!母親気取り!!」

「なんて口の効き方…そんな風に育てた覚えは「あんたに育てられた覚えねえよ!!」

バイクのキーをひつつかみ玄関を飛び出しエンジンをかける

前輪を軸に旋回し道路へと飛び出す

「(朝から最悪だっ)」

宮地の家にバイクを置かせてもらいお母さんに挨拶をする

「清志ったら…待っててあげたらいいのに」

「いえ、私が寝坊したんで…」

「待ってあげるのが男じゃない？あ、急ぐのよね。いつてらっしやい
未来ちゃん。気をつけてね」

「…行つてきます」

なれない言葉を言つて集合場所まで走る

…こんな感じなのかな母親って

「遅え!!」

「わり…」

着いたと同時に宮地が怒鳴る

まあ私が悪いから謝る

「つかなんでサングラス」

「寝坊したから何もしてないんだよ。すっぴんなんか見せられるかアホ」

「未来先輩の素顔見てえ「拒否」即答!!」

ゲラゲラと笑う高尾に緑間が朝からうるさいと殴る

「ギリギリで全員揃ったな、早く乗れ」

中谷先生の指示で皆バスに乗り込む

一番最後の私は空いてる席、宮地の隣に座る

「は!?!、なんで(っ!?!)」

「他にあいてないんだからしょうがねえだろ」

「…:アイツ等ぜってえ轢く」

どうしてそうなったか分からないが、とりあえず腹減った

そう思ってお腹を撫でると目の前におにぎりが差し出された

「…何」

「食えよ。どうせ何も持ってきてないんだろ」

「…サンキュ」

口にしたそれは良い塩加減で凄く美味しかった

それを口にすれば何故か宮地がツンと窓の外を向いた

「…もしかして宮地が?」

「わりいかよ」

「いや、全然」

珍しく照れてる宮地にバレないように小さく笑った

いつの間にか朝のことは頭から消えていた

宮地 side

暫く外を眺めていると肩に重みを感じ、視線をずらしてみると未来が俺の肩に寄りかかっていた

サングラスの上から見えた瞼は塞がれ、小さく寝息が聞こえた
「あり？未来先輩寝ちやってます？」

前の座席から顔を覗かせた高尾は飴の袋をぶらぶらと揺らした

「高尾、それ寄越せ」

「もともとその予定っすよ！」

「おおサンキュ」

「高尾、ちゃんと座つとけ」

「はい…あ！監督と大坪さんもどーぞ!!」

「食べ物を投げるな高尾！」

「すみません！」

そして何故かニヤニヤと俺たちを見て引っ込んだ
なんなんだろうぜえな

飴を口に放り肩で眠る未来を見…サングラスが痛え
寝てるから良いだろうとそつと外す

「…睫毛なっが」

普段つけまつげをしているの為気にしたこと無かったが元々も長い
い

化粧をしていないせいかわつものキツさがなくなり取っつきやす
そうになった

そしてサングラスがなくなって寝やすくなったのか肩に擦りよる
未来

猫みたいだと思ひ頭を撫でてやると頬がゆるんだ

そして視線を上げると…

「何ニヤニヤ見てんだよ木村あ」

「いや？ただ宮地幸せそうだなと」

「…後で刺す、ぜってえ刺し殺す」

はいはいとあしらう様にし隣の奴と話し始める木村
「ふああ」

朝が何時もより早かったせいで眠くなってきた

前にもこんなことしたなあと思いつながら未来の頭を枕にし、後ろで監督と大坪が練習メニューを話しているのをBGMに目を閉じた

「高尾、それ送ってくれ」

「俺も」

「私にも」

「うえっ!?まさかの監督の参加!!ついでに真ちゃんにも送っちゃおう」
「何故その流れになるのだよ!」

騒がしい声に目を上げれば携帯片手に笑う高尾

携帯には赤いランプがついている…

「高尾…」

「うわ!おはようございます宮地さん!もうすぐ着きますよ!」

「折るぞ」

「何を!？」

携帯を隠し騒ぐ高尾に苛立ちながら未来にサングラスをつける

「ん…あ?着いた?」

「おはようございます!未来先輩!もうすぐつすよ!」

「全員荷物纏めろよ!」

大坪の言葉に窓の外を見れば宿泊予定の宿が見えた

未来 side

「げえっポツロ…」

「高尾うるさいぞ」

バスを降り、泊まる宿を見て呟いた高尾に大坪が注意する
けど確かにこれはない

「聞いてねえぞこんなにもボロいなんて…帰る」

「帰んな!!バカ!!」

踵を返した私の腕を掴む宮地

そのまま引きずられるように中へ入った

「おい荷物こっちー!」

「へーい」

後ろを歩く高尾達に木村が声をかけた

やる気のない返事のあとに緑間の大声が聞こえた

「なにやってんだアイツ等…おい見てこいマネージャー」

「誰がマネージャーだ。ぶっ殺すぞ」

「んだと!もがっ「頼む月島」

青筋を浮かべた宮地を木村が抑え大坪が言ってきたので仕方なく
来た道を帰る

そして洗面所に溜まる奴らに近づくと

「遅えよ、何して……」

目の前にいる女の子

包丁片手に返り血を浴びている

「何、誰やったの」

「やってな「未来先輩!!真ちゃん、真ちゃんがあ!!」

「高尾ふざけるな!!」

「何!緑間がやられた!?!なんてことだ!」

「先輩も乗るのではないのだよ!!」

高尾の茶番に乗ると緑間に全力でツッコまれた
まあそれよりも…

抱きついてる高尾にヘッドロックをかける

「おいコラ。てめえらが来ねえせいで迎えに来させられてんだよ…メイクする時間無くなんだが…どうしてくれんだ、あゝあゝ？」

「せんぱっギブ、ギブっす!!」

腕を叩く高尾に腕を外して2人を睨みつける

「で？」

「…ハーゲン○ッツ奢ります」

小さくなる2人に鼻を鳴らし立ち尽くしている3人に向き直る

「悪いな、コイツ等回収してくわ」

「えつと…あなたは？」

女の子が恐る恐るといった感じで見上げてきた

後ろの男子2人も視線がこっちに向いている

「3年生の先輩で月島未来先輩！合宿中に飯作るのに来てもらってるんです!!マネージャーやってくれればいいのに…」

「黙れ高尾」

「すみません!!んでこっちが誠凛の監督さんと1年レギュラーっす
！」

「相田リコです」

「黒子テツヤです」

「火神大我っす」

誠凛？聞いたことあるな…

誠凛、誠凛…ああ

「最後のシュートが決まってりや勝ってたところか」

「ぎゃん!!先輩ってば心折れるう!!」

「先輩…」

あれから部屋に行き、メイクをバッチリしまだ朝ご飯の時間だが夕飯のメニューを考えに（昼はおにぎりだ）中谷先生に預かった食材の袋を腕にかけ広間に行く

「おっと」

「すいません…あれ、月島さん、ですよね」

「ああ…黒子、だよな？フラフラだぞ。大丈夫か？」

「はい…」

何故かフラフラの黒子を支えようと中から声がかかった

「黒子、吐いたらもう一杯追加な」

「は？」

黒子の肩を支えながら中へ入れれば沢山の目が集まり眉間に皺がよった

皆、箸を持つ手がふるふる震えている

皆を代表してか面白い口の男が立ち上がった

「く、黒子…」

「はい？」

「なんでお前は美女ばかり連れてくるんだよ!!」

「え…すいません？」

「分からないのに謝るなよチクショー!!!お姉さんメアド交換しましよ
う!!」

詰め寄ってくる男

え、てかなんかひよろくね？誠凛

こんなところに負けたのアイツ等…

「うぎ。私より低い男子とか興味ねえし、つか会ってすぐそれとか信じられない。刺すぞテメエ」

「この人めちや辛辣!!」

大袈裟にシヨックを受ける男を無視する

皆が集まるところに行けば朝会った2人と目があった

「えつと…火神？」

「うす」

「リスみてえだな、お前」

可愛いと言いなながらその頭を撫でると顔を真っ赤にして振り払った

「よし、俺も火神みたいに食って美人さんに頭撫でて貰う！」

「こりねえなコガ」

「そう言う日向もめつちやかき込んでんじゃん！」

何故かいきなり口にかき込む誠凛の男達

それを冷めた目で見やると、隣から黒いオーラが漂ってきた

「今日は練習倍いつとく？」

相田の言葉に男達は静止した

「あ、月島さん！」

「ん？」

「ちよつと監督さんの所に案内して欲しいんですけど」

「あー、これ冷蔵庫に積めて飯炊くから、ちよつと待ってもらっていいか？」

「はい！」

相田と体育館までの道を歩いているとふと聞かれた

「月島さん身長高いですね、スタイルもいいし」

「春に175cmだったな」

「すごっ。それにモデルの黄瀬君に凄く似てますよね…親戚か何かですか？」

「いや、知らね。つか雑誌とか見ねーし、その黄瀬君とやらをあんま見たことがない」

学校でも何人にも言われたことだ

そんなに似てるのか…

「月島さん…実は姉弟だったりして」

「2つ下に弟がいるらしいが、産まれた頃の写真しか見たこと無いし…そうだったりしてな」

「え!？」

部屋にある写真を思い返しながらそう返すと相田は驚いたように私を見上げた

「ま、もしそうだとしても、向こうは姉がいるとも知らんさ」

体育館につきすぐそこにいた部員を呼びつけ中谷先生を呼ぶよう

に言ううちから高尾の声が聞こえた

「未来先輩!! マネージャーやりに来てくれたんすか!？」

「待ってたぞ雑用!」

「誰が雑用なんかするか!! 忙しいんだよ! 刺すぞ高尾、宮地」

「巻き込まれた!!」

「今のところ飯作るしか仕事ねえだろ! 轆くぞテメエ!」

「1軍何人いると思ってるんだ! 撲殺すんぞ!」

「高尾、宮地。外周行ってこい。それから月島。喧嘩した罰として食事は夕飯から誠凛の分も作りなさい」

「!?!」

何か逆らえないオーラを背負った中谷先生に3人揃って頷いた

体育館から調理場に戻れば丁度ご飯が炊けていた

蓋を空ければ湯気が溢れて私を襲った

炊き上がったご飯を口に入ればいい感じの固さ

取りあえず塩を準備しなきや

少し入っただけでも体育館の中は暑い

あの中練習をしたら出て行く塩分の量はハンパないだろう

試しに1つ握り口に入れる

「…塩と砂糖間違えたわ」

一口しか食べてないそれを捨てるのは勿体無い…が食べたくはない

…よし、ロシアにしよう

あわよくば宮地に当たれと思いつながら大量のおにぎりを作った

「……作りすぎた、か?」

数分後、おにぎりが大量に入ったトレーが5段

流石に1人じゃ持てないので…

「あ、中谷先生。おにぎり作ったんですが量が多くて1人じゃ…はい、

お願いします」

1軍を数人出してくれるようだ

携帯をしまい取りあえず中谷先生の分を取り分け、全部にラップをかけて1軍到着を待った

勢いよく体育館の扉を開ければ中で休憩中だったであろう全員の視線が集まった

「野郎共飯だぞ」

後ろから1軍5人が順番に持ってきたトレーを置くのを見、手に持っていた中谷先生の分を手渡す

「私の分まですまないね」

「いえ」

振り返ると皆、ギラギラとした目つきで並ぶおにぎりを眺めていた
「すっげー量…」

「こつちから梅、昆布、鮭、おかか、ただの塩。ウエットティッシュはここだ。どうぞ召し上がれ」

その台詞と同時に皆トレーに群がった

「うおーうめえ!!」

そういえば一つ言い忘れたことがあると思いつ出した

「そういえば一つだけ…」

「うえ、あつま!!」

「砂糖たっぷり入れたおにぎりあつから…って、すげえな宮地。あの中から一番最初に当てるなんてな。運が良いのか悪いのか」

宮地は口に入れたおにぎりを水で流し込んでいる

舌に味が残ってるのか舌を出し涙目で睨んでくる

「うえ…テメエも食えよ!!」

「それ一口食ったよ」

「は??」

「つまり…食べかけ?」

高尾の言葉に頷いた

すると高尾は口を両手でおさえた

「み、宮地さん、また…ぶふあ!!」

「また?」

「なんでもねえ!!高尾!これ食べ!そんで表でろ!!」

「ちよ!宮地さん!?!首締まって、んぐ!?!」

「??」

首を傾げ宮地に砂糖むすびを口に入れられ引きずられて行く高尾を見ながら塩むすびを口にした